

1920年代のソ連における ロシア貴族屋敷の研究

— V. V. ズグラと OIRU の活動 —

坂内 徳明

1

ロシア革命から間もない1922年12月22日、19歳の若き芸術学徒が一つの研究会を組織すべく呼びかけ、それに呼応した10名程の人々が結集した。場所はモスクワ市内中心部北東の第一ズナメンスキイ横丁（現在の第一コロポフスキイ横丁）25番地、通りから中庭に入ったところに今なお聳える6階建て建物の或る部屋である。集まった人々の中でも最年少であったにもかかわらず、会の呼びかけ人となったB・B・ズグラは、その後の会の活動を全面的にリードし、名実ともに中核として活躍するが、1927年に不慮の事故により24歳で夭折する。そして、彼の不幸な死と並行するかのようには、研究会もその活動を急速に「終息」する／させられていくべき運命にあった。

この「ロシア貴族屋敷研究会」（Общество изучения русской усадьбы, OIRUと省略されることがある）の目的は、なによりもまず、モスクワ近郊をはじめとしてロシア各地に無数に存在した地主屋敷（ウサーヂバ）の建物ならびに領地内に残る文化財の革命後の実情を把握することにあった。そして、このウサーヂバという現象を革命前の研究とは異なるアプローチによって考察し、広義の芸術史の研究対象としての的確に位置づけ、さらには保護ならびに文化資源としての継承をめぐる問題点について議論し、その具体的方策の道を探ることにあった。あらたに成立したソビエト政権下、各種の文化財保存の動きは、例えば、当時、ソビエト政府教育人民委員のA・B・ルナチャルスキイらによる多くの努力がなされていたとはいえ、革命と国内戦による混乱の中でけっして十分とは言えなかった。何世紀にもわたっ

て継承されてきた、多大な歴史的・芸術的価値を有する文化資源が日々刻々、いや一瞬一瞬に瓦解・消滅しつつあった。特に、かつての支配層たる地主貴族の豪華な邸宅や室内外を飾っていた文化財は、正反対のイデオロギー的雰囲気包まれた革命直後からは敵視と憎悪の対象となり、破壊と強奪に任されていた。この過酷な現実にたいする絶望的な焦燥感と危機感こそが研究会に集まった人々に共通したモチベーションだった。

彼らの関心の底流にあるものは何だったのか。それは、少々先回りをして言えば、革命前の富裕な貴族層とその文化にたいするノスタルジーや過去への憧憬とはまったく別物だった。また、20世紀初頭に始まり、1920年代後半まで渦巻いたアヴァンギャルド芸術運動とは逆方向に見えるとするれば、それも表層的な感想でしかないだろう。このウサーヂバ研究会は、現在文化に向けられた執拗かつ緻密な戦略に基づく、すぐれて「学術的な」文化の記述・研究、その成果の社会への啓蒙、そして、それと並行して過去の文化資源を「野蛮な掠奪」から保全するためのプログラム構築を志向していた。それは、ロシア革命後の文化と芸術の「危機」に対峙した無数の人々と集合体の各種組織の中でもきわめてユニークな存在であり、規模こそささやかであったにもかかわらず、この研究会が目指したパースペクティブならびにその問題提起の点で、同時代のみならず現代の芸術文化研究全体に与えた影響は大きなものがある。本稿の目的はそのことを記述することにある。

以下では、まず、文字通り革命期1920年代を駆け抜け、燃焼しつくした、まさしく天才の名前にふさわしいズグラの生涯と仕事を叙述する。次に、この研究会の活動状況とその後の会の命運について紹介し、ロシア文化（史）研究における会の意義について素描してみたい。それは、同時代に、具体的対象とディシプリンこそ異なるとはいえ、ソ連（ロシア）の文化変動の多種多様な実体に直面し、その社会的事実を観察・記述すべくフィールドへ吸い寄せられ、果敢に飛び込んでいった人々の群像が織りなす知的関心史（精神史）の一頁となるはずである。

2

ヴラヂミル・ヴァシリエヴィチ・ズグラは1903年3月27日に生まれた⁽¹⁾。誕生の場所については、彼自身がキシニョフともクルガン（シベリア）とも記している⁽²⁾。父親（1865-1924年）はオレンブルグ県貴族会会長だった。公式文書によれば、一族のルーツは19世紀初頭のルーマニア貴族イオアン・ズグラとその妻スル

タナ・カンタクゼンに遡ることができるという。家族がモスクワへ移り住んだ後、ヴラヂミルはС・И・ロストフツェフ＝ギムナジウムへ入学、早くから音楽や絵画に才能を示していたが⁽³⁾、自伝によれば、14歳の時に中世ロシアの芸術史に興味を持ち、芸術史家で建築史家のB・H・エデングの教えのもとで学ぶこととなる。後者はロストフ・ヴェリーキイの建築が専門だが、17世紀ロシア建築に対して西欧の理論にもとづくフォルマリズムのスタイル分析の方法を適用したことで知られる研究者である（ただし、1919年にチフスにより30歳で夭折）。それを契機としてズグラはA・Л・シャニャフスキイ名称モスクワ市立国民大学（1908年創立）附属芸術カビネットへ参加、ここで1918-1920



図1 B・B・ズグラ

年にかけて多くの講義を聴講した（A・B・チャヤノフ⁽⁴⁾によるモスクワの考古学・地名学、B・P・ヴィペル、B・Г・サフノフスキイ、上記エデングによる芸術史等）。

1919年春、彼はモスクワ考古学大学（1907年創立）芸術史部門に入学した。また、チャヤノフのゼミナールにも参加し、ここでは「モスクワの文庫史」と題する報告を行っている（ただし未刊。ズグラはチャヤノフを自分のモスクワ学の師と見なしていた⁽⁵⁾）。この時期のズグラには、1810-1820年代のモスクワ文化をテーマとした大きな仕事をする構想が生まれていた。1921年には考古学大学の課程を修了し、考古学・芸術学研究所の第二部研究員となるが、これは院生に相当する。ここでの同期生は10名だが、6名の修了者の中にはA・H・グレチとГ・B・ジトコフ（この二人はウサーヂバ研究会で共に働くことになる）、M・B・アルパート、И・Я・コルニツキイ、B・H・ラザレフら1920年代後半からのソビエト美術研究の核を担うべく錚々たる顔ぶれが揃っていたが、ある人物の回想によれば、ズグラが最もエネルギーであったという⁽⁶⁾。

ズグラが10代後半の若輩ながらも、モスクワを中心としたロシア建築史の研究者としてすでにスタートを切っていたことを示す事実は数多い。現代のウサーヂバ書誌学者であるГ・Д・ズロチェフスキイが見出したアーカイブ資料には、市内建

建築物を調査し、アーカイブや図書館で支障なく活動する協力を求めるための身分確認・要請書（1918年9月3日付）があるが、これを発行した「モスクワ考古学協会」の「古きモスクワ研究委員会」は当時のモスクワ研究の中核を担う存在だった。そして、上に記したチャヤーノフの推薦によりズグラは1920年6月からこの委員会の正式メンバーとして働くこととなる。また、1921年2月には、博物館「古きモスクワ」（1919年4月創設）で開催された「17-18世紀絵画に見るモスクワ」展の組織に参加、展示全体がチャヤーノフによって企画されたものであるから、これも彼の推挙によるものと考えてよい。そして、おそらくこうした精力的な仕事が認められたために、ズグラは11月から同博物館で学術秘書として働いている。この他、芸術学国立アカデミー（1921年に創立、1931年まで活動）研究員、建築研究委員会学術秘書、また、物質文化国立アカデミー・モスクワ部門の研究員としても働いていた。

彼はこれらの研究活動だけでなく、教育にも多くの関心を示した。建築・美術を中心としたモスクワの歴史と文化に関してずば抜けた知識を持った10代後半の若者が講師としてレクチュアを行う——それは、革命直後の混乱期、あるいは物知り青年への物珍しさ等々の条件を抜きにしても、学歴や業績を越える実力と魅力がズグラに備わっていたことの証明である。1920年からJI・Φ・ルジェフスカヤ＝ギムナジウムでモスクワに関する講義を開始し、その中で、モスクワを「世界史的で、きわめて多面的な町」として「統合的な」研究の必要性を語った他、翌1921年8月からは「衣装史の関わりから見たスタイルの歴史に向けて」を年問題目としてレクチュアを行っている。その後は、トヴェリ教育大学（1923-1924年）をはじめ、多くの研究・教育機関で精力的に講義ならびに講演をしている。そして彼のテーマと関心がきわめて多岐にわたっていたことは注目すべきである（「18-19世紀ロシア建築の第二の道」「芸術作品の発生と生」「クスコヴォ劇場」「建築のコンポジションにおける物理的ならびに視覚的三角形の諸問題」「モスクワ建築」「18世紀末-19世紀初頭のモスクワの演劇」「ロシア・アンピール問題に寄せて」「B・A・トロピニンによるプーシキンの肖像画」「中国のモニュメント芸術と西欧の反映」「移動展派以前のロシア絵画における静物画の問題」「18-19世紀前半のロシア建築家の社会・経済状況」「ロシアにおけるバロック誕生の問題」等々）。後に述べるが、ズグラの活動はいわゆるアカデミズムの内側に「閉じる」ことなく、幅広く社会に向けられていた。彼自らが先頭に立って立ち上げた「ウサーヂバ研究会」の調査・研究成果を数多くのガイドブック編纂へつなげていったこと、そして、各種の歴

史・文化遺産を社会に広く共有するためのアイデアを次々と生み出していったことは、彼が「教師」としての使命感を持ち、すぐれた社会・文化啓蒙家であり、抜群の能力ある活動家であったことと無縁でなかった。

多岐にわたる彼の研究の中で大きな柱の一つとなったのは、17世紀以後のロシア建築史に関する資料発見とその分析・解明である。そのために彼は、モスクワにおける資料閲覧は当然として、1918年から4度にわたってペテルブルグ（ペトログラード）を訪れている。調査場所は美術アカデミー、ロシア美術館、プブリーチナヤ図書館（現在のロシア国立図書館）、エルミターージュ美術館その他であり、そこでは、ピョートル以前のモスクワ・トポグラフィに関する調査のほか、ロシアで最初期の風景画家Ф・А・アレクセーエフがモスクワを描いたシリーズ絵画57点、М・Ф・カザコフ、В・И・バジェノフ、Дж・クヴァレンギらいずれも18世紀ロシア建築を語る上で欠かせない建築家たちのスケッチ作品等を見出したという⁽⁷⁾。特にバジェノフ（1738-1799）は後に書かれるズグラの博士候補論文のテーマとなる。

こうした仕事ぶりを勘案すれば、ズグラの処女刊行作品が『古きロシアの建築家たち』（1923年）と題されていたことは自然である⁽⁸⁾。これは、18世紀から19世紀半ばまでの建築家19名（И・ザルードヌイからК・トンまで）を取り上げ、新たに発見されたアーカイブ資料をふんだんに紹介しながら「ロシア建築」形成史を構築し、かつ論評しようとする野心的な仕事である。特に、アンピール建築様式の代表者として知られるА・Г・グリゴリエフへの着目は今なお評価される。アンピール様式は彼が研究の最初から変わらず関心を持ってきたものの一つであり、ウサーヂバ建築について考える上でも欠かせぬテーマである。ウサーヂバ研究、特に研究会での活動については次節で触れたい。

彼の研究テーマの多種多様さは、彼の仕事の全貌に関心を持ったすべての人々を驚嘆させる。ロシア芸術史のきわめて多くの対象に関心を抱き、その綿密な調査ならびにその緻密な分析、そして理論的考察へと精力的に向かっていく彼の姿は天才的としか言いようがない。しかしながら、やりたいことが無限なまでに多いことに加えて、生前の時間があまりに足りなかったために、報告ならびに草稿が成文化されずに原稿のまま残り、死後に刊行されたもの、あるいは今なお未刊のものが数多いのも事実である⁽⁹⁾。研究成果の報告ならびに講演題目は上でそのいくつかを例示したとおりである。それらのいずれにおいても、以前には未知であり、ズグラによって見出された貴重な情報が提供されているのは当然としても、芸術史の新たな視

点と新資料に関心を示し、それに対する斬新な問題設定を行い、意外とも見える結論を導き出すことが多かった。その典型的な例は、アンピールやバロックに関する考察である。彼の死後、1930年代以降のソビエト芸術史研究にあって、おそらくは「排外的」「非西欧的」傾向が強まっていくことに起因して、議論が消滅しタブー視されてしまうこの分野への関心は、ズグラならびに彼の周辺にいた芸術史研究者にはきわめて重要かつ意義あるものだった⁽¹⁰⁾。ここでそれに関して詳しく述べる余裕はないが、ロシア・バロックについてズグラは、ロシア建築が1640年代に「第一段階」の時期を経験し、1650-1660年代に開花したとして、それまでのバロック観を一新させ、西欧芸術を視野に入れた比較芸術史研究への道を模索しようとするのである。

西欧の芸術史研究の理論と方法を十分に咀嚼し、ロシア芸術史を新たに構築しようとする大きなモチベーション、それを裏付けるべく英語、フランス語、ドイツ語の芸術関連文献の渉猟、それによって得られた並外れた情報量、さらに理論的緻密さに加えて、斬新なアイデアがズグラにはあった。そして、この彼の仕事の底には、ズロチェフスキイの指摘によれば、1920年代半ば以降、それまでの芸術史のきわめて記述的な歴史に満足することなく、芸術作品とその諸問題を新たな視点から検証し直し、「何よりもまず、過去の知識を生きた現実と結びつけたいとの願い」によって方法論を模索することで新たな芸術学を構想しようとする方向性があった⁽¹¹⁾。

ズグラが自らの芸術史研究を推し進める上で大きな関心の的となっていた具体的地域は、モスクワならびにモスクワ近郊（ポドモスコヴィエ）である。モスクワに関する彼の抜群の知識と知見はすでにあまねく知られていたため、多くの仕事が若輩の彼に求められたし、彼もこれを自分の重要なテーマとした。その成果の第一は、モスクワ共産主義経済出版所の要請による、モスクワ住民アドレス帳『全モスクワ——住所録ならびにガイドブック』1925、1926年度分の編纂（出版されたのはそれぞれ1924、1925年）である。このシリーズは1936年まで毎年刊行されたが、革命後の首都モスクワに関するもっとも基本的な住民・施設データベース作成の歴史がズグラによって開始されたことは大きな意味を持っている⁽¹²⁾。同時に、『地図に見るモスクワ——参考書、案内書』（1925年）、モスクワに関するソビエトで最初のミュージアム案内書『モスクワのミュージアムと名所』（1926年）の編集にも携わっている。

モスクワ研究に関するもう一つの成果は、モスクワならびにモスクワ近郊（ポド

モスコーヴィエ)のミュージアムを中心とする文化遺産の案内書の刊行である。具体的には、И・И・ラザレフスキイ⁽¹³⁾とともに「ポドモスコーヴィエのミュージアム」ガイドブックシリーズを刊行(1925年)、ここには13の名高いウサーヂバが取り上げられたが、全6冊中のクスコヴォ、ツァリーツィノ、スハーノヴォの3冊をズグラが執筆した。ズロチェフスキイによれば、そのどれもが「旅のメモ書き」のスタイルを取りながらも、学問的に正確で、豊かなイメージ、的確な特徴づけと概括化を含む見事な文章で表現されており、今なお学ぶところが多い。例えば、クスコヴォは「農奴芸術の名で知られる巨大な現象」、ツァリーツィノについて「一度も住まわれたことがなく、完成されたこともない建築的廃墟のミュージアム」、「中世ロシア芸術の独自ナルネサンス」であるといった記述が読めるのである⁽¹⁴⁾。

1927年6月にズグラは、考古学・芸術学学術研究所の博士候補審査に合格する。テーマは「В・И・バジェノフ関連の問題と作品」であり、審査のオポーネントとなったのは、民族芸術ならびにアンピール様式の専門家А・И・ネクラソフ⁽¹⁵⁾と書籍芸術史の分野でソビエト最大の専門家となるА・А・シドロフである。ズグラは、処女作で扱ったグリゴリエフへの関心の延長線上にバジェノフを置き、ロシア人として西欧の建築を学んだ最初の建築家である彼をロシアと西欧建築の「連続と不連続」を証明するキーパーソンと見なすのである⁽¹⁶⁾。そこで彼自ら見出した多数の未使用資料が使われたのは当然である。この論文をもとにズグラは大きなモノグラフへ向かう意図で、1927年秋からそれに着手する計画であったが、それは突然の死によって中断された(ただし、候補論文そのものは死の翌年、友人たちの手によりカザニで出版される)。

1927年7月、モスクワの名だたるウサーヂバの一つであり、ズグラが最も注目するクスコヴォのグロッタ(庭園内の人工洞窟)で「18-19世紀ポドモスコーヴィエの庭園とパーク」と題された展示が開催された。この企画はズグラが発案し、自ら運営し、カタログも彼が執筆した。展示には図面や各種絵画、貴重書をはじめテーマに関する約120点の資料(自身ならびにウサーヂバ研究会メンバーのコレクションからのものを多数含む)が並べられた。今はカタログでのみズグラの意図を窺うしかないが、グロッタの中での展示が見学者にどのような印象を与えたのか、大いに好奇心をそそられる。

この展示の仕事に一区切りをつけた彼は、この夏も例年恒例となったウサーヂバ調査に出掛ける予定だったが、そのプランを変更する。そして、つかの間の休暇を取るべく、クリミヤ海岸へ向かう。海岸の町フェオドシャに滞在していた彼を不幸

が襲う。9月12日に最初の地震があり、その後5日間にわたって絶え間なく余震が続いた。17日には17回繰り返す中、18時6分に4バールの大きな地震があり、この時に猛暑の中で遊泳していたズグラは心臓発作を起こして亡くなった。24歳である。

彼の急死が与えた反響がきわめて大きかったことは、これまで述べた彼の仕事の抜群の質量とスケールの大きさから見て十分納得できる。その年の12月、翌1928年4月には、複数の研究組織によって追悼集会が開催されたが（例えば、1927年12月3日に国立芸術アカデミー、考古学・芸術学研究所、ロシア・ウサーヂバ研究会の共催で）、その中には研究所の芸術史課程受講者たちの集まりもあった（12月11日）。彼の仕事と活動が高く称賛され、多くの追悼文が発表されたのである⁽¹⁷⁾。また、友人たちはズグラの著作目録の作成と未刊論文2点の公刊の準備にもただちに着手し、これは「ウサーヂバ研究会論集、第6-8冊」（1927年）に掲載された。さらに、原稿のまま残された多数の文章をまとめて生誕百年記念論文集として刊行するという計画も立てられ、その序文が準備されたにもかかわらず実現しなかった（序文の著者はウサーヂバ研究会最後の三代目代表者のA・B・グリゴリエフであり、1932年に執筆した彼は翌1933年に逮捕され、銃殺された）。かろうじて1933年に出版された『ソビエト大百科事典』（第一版）には、ごく短いながらズグラの名前は立項されているにもかかわらず、ズグラが志向したロシア芸術史学の流れは時代のそれと大きな齟齬をきたしていた。

彼の活動と仕事があまりにも「性急」だったというのは無責任で残酷な言い方である。ただし、以下に述べる「ロシア・ウサーヂバ研究会」創設後の期間は、まるで自分の残り時間が4年しかないのを予期していたかの奮闘ぶりである。ズグラは「アイデアが泉のごとく湧き出す」⁽¹⁸⁾、芸術学の真の研究者で、かつ音楽家で画家、そして何よりも学の生来のオーガナイザーであった。そうした彼に24年の生涯はあまりにも短すぎたとの感はぬぐい切れない。

彼が自らの仕事の中できわめて大きな時間を割いたのは「ウサーヂバ研究会」の創設ならびにその全面的な活動と指揮だった。彼には、この研究会を推し進めることでウサーヂバ研究を独立したディシプリンとし、かつ「ウサーヂバ研究所」設立の夢があった。

3

「ロシア・ウサーヂバ研究会」の創設は、本稿冒頭でも記したとおり、1922年12月22日の集まりの場で宣言された⁽¹⁹⁾。一週間後の12月29日の会議では、臨時の執行部メンバーとして代表にズグラ、代表代理 И・В・エヴドキモフ、学術秘書 А・Н・グレチ、資料管理者 С・А・トロポフが扱われた。会則が内務省教育人民委員会によって承認されるのは翌年5月7日であり、これが研究会の正式認可である。さらに、6月7日には、先の代表と代表代理の他、学術秘書に В・П・デニケ、会計 А・Н・トリシェフスキイの他、Ю・А・バフルーシン、グレチ、И・М・カルタフツォフ、トロポフによる正式な執行部が改めて選任された。こうした体制樹立を待ちかねたかのように、会は活動を全開させることになる。ほぼ毎週、ズグラの部屋で執行部の会議が開かれた他、この年1923年夏の調査（クスコヴォ、オスタンキノ、チュリョムシキ、ヤセネヴォ）が開始され、10月末にはその報告会が行われている。1923年以降、会は毎年夏冬の2回、すなわち夏季（5月から9月まで）のウサーヂバのフィールド調査、ならびに冬季（10月4月）のミュージアムならびに建築物調査を行うことになる（夏は1923-1929年、冬は1923-1928年。1930年に調査が行われたことはメンバーの記録にあるが、詳細は不明）。この調査を実りあるものとするために、各現地へは事前に「ロシア・ウサーヂバ研究会より」と題された17項目の質問からなるアンケートが送付され⁽²⁰⁾、「計画書」が毎回事前に作成・刊行、周到に準備がなされ、調査後に成果を持ちよって情報交換を行う報告会が公開で開催された（「計画書」は1929年まで5冊が刊行）。調査が行われたのは、初年度の1923年夏を皮切りとして、1928年までにモスクワ郡のすべてのウサーヂバ（19世紀半ばまでに成立していた165）に研究会メンバーの足が踏み入れられた。その30回以上のエクスカージョンにズグラは参加し、エクスカージョンのみならず会の活動の全体がズグラの圧倒的なリードでなされた。彼は会の伝説と神話になるべくしてなった人物である。会員数は1927年時点で150名に達した⁽²¹⁾。さらに詳細な調査を行った Л・В・イヴァノヴァとズロチェフスキイによれば、93名が「活動会員」（1922-1930年）であったという⁽²²⁾。

研究会の基本的方向に関しては、会開設翌年に発表された綱領的論文によって見ることができる。むろん、これもズグラによって書かれた。それを参照してみる⁽²³⁾。

論文冒頭ではまず、会の設立に集まった人々の多くがロシア建築を研究するモスクワ大学の学生であること、特に都市郊外の建物における18世紀-19世紀前半のロシア建築史ならびにその諸問題が関心の中心にあることが述べられる。次に、研究会に集結した人々に直面する研究課題と方法論は、これまでのロシアのみならず西欧にも例がない最初で、まったく新たなものであるという。そこでは、例えば、これまで十分に研究がおこなわれてきたイタリアのヴィラ、ドイツの城が想起されるが、ロシアでは、重要な資料の確認もされていないとして、これまでのウサーヂバ研究が現時点まで「偶然的で無秩序」であり、理論面が未開拓であり、方法論すら手が付けられていないこと、要するに、ウサーヂバ学(уса́дбове́дение)がまったく存在しないと結論づけられている。これはいかにも挑発的な結論である。というのも、ウサーヂバ研究に関するごく一般的な理解によれば、革命前の20世紀初頭以降、ウサーヂバに対してきわめて大きな関心がわき起こっていたからである。収集されたかなり多量の資料に基づいて、ウサーヂバという文化現象を正面から論じた注目すべき研究が集中的に登場していた。例えば、『地主のロシア』(1910)のH・H・ヴランゲリ、П・П・ヴェイネル、15冊からなるシリーズ『モスクワ近郊』(1912-1919)の著者Ю・И・シャムリン、П・С・シェレメチェフ、ルコムスキ兄弟らの仕事、また、芸術雑誌「昔の日々」(1907-1916年)や「首都とウサーヂバ」(1913-1917年)には毎号のようにウサーヂバ関連資料が掲載されていたし、「芸術世界」とA・H・ベヌアたちがウサーヂバ文化に高い関心を示していたからである⁽²⁴⁾。当然ながら、ズグラはこれらのウサーヂバ研究史を知り、彼らによって蓄積された潤沢な資料について十二分に周知していた。しかし、彼が「いづらか離れて立っている我々は、この分野における革命前の仕事の全体を落ち着いて評価できる」と記すとき、それら過去の研究を体系化し、かつ批判的に継承するところこそが重要だとする新たな研究開始の宣言がそこにあった。それは、結論的に言えば、20世紀初頭に頂点に達していた貴族趣味的・芸術至上主義的なウサーヂバ嗜好から、芸術学としてのウサーヂバ研究への大きな転換を意図していたのである。

だとすれば、新たなウサーヂバ学とは何か？ズグラは、それが独立したディシプリンとなることは可能か、と問いかける。確かにそれを完全に自立した学問と見なすのは困難であるとしても、芸術史研究の中で一つの独自の領域として認めないわけにはいかないとした上で、それを二つの面から理解できるとする。それは第一に、ウサーヂバ全体を諸要素とコンポジション、また有機的な構成要素を、歴史=習俗的パースペクティブを視野に入れ、相互に影響しあうファクターとして研究す

ること、第二に、ウサーヂバのテリトリーに存在する芸術資料の構成と意味を考える上で、それがウサーヂバ的であるか、なしかを問わずに、資料をもらさず精査することである。そして、前者がウサーヂバ学 (уса́дбове́дение)、後者がウサーヂバ記述 (уса́дбоо́писание) であるという。当然ながら、ここにはウサーヂバをめぐる logy と graphy の関係が明確に理解されていた。

次に、研究会の作業項目の柱となるのは (1) 建築、(2) 庭園とパーク、(3) 理論的問題、(4) 演劇、(5) 歴史と習俗、(6) 絵画と彫刻、(7) 工芸・民芸等の実用芸術、であるとされる。中心となるのは、言うまでもなく (1) であろう。特に、ウサーヂバの建設においてロシア建築史初期における最良の建築家 (例えば、Дж・クヴァレンギ、И・Е・スタロフ、М・Ф・カザコフ、Д・И・ジリャルディ等) の活躍、ならびにウサーヂバ建築におけるスタイルの変化・反響・歪曲と進化といった問題をもっとも重要な課題である。さらに、農民芸術と農奴芸術、都市外部の建築的風景といった郊外文化をめぐるさまざまな問題も研究会にとって基本的なテーマとなるという。

研究会の研究資料の基本としなければならないものとして、ズグラは次の五つをあげる。(1) ウサーヂバ・カード (アルファベット別とトポグラフィ別の二種)、(2) ウサーヂバ地図、(3) イコノグラフィ・カード (絵画、スケッチ、版画、リトグラフ、陶磁器その他の実用芸術作品におけるウサーヂバ)、(4) 典拠リスト (①アーカイブ資料、②文学資料として日記、メモ、回想、書簡、旅行記、現代の記述)、(5) ビブリオグラフィ・リスト (研究対象としてのウサーヂバ)。ここには、関連資料を徹底的に集積・整理し、ウサーヂバ文献目録の作成を基礎とした書誌学へと向かう明確な方向性がうかがえる。文献・文字資料が広範囲に及ぶことへの目配りは当然だが、イコノグラフィの重視は重要である。また、研究会内の内部には、フィールド調査、書誌、カルトグラフィあるいはウサーヂバ地図作成、を課題とした三つの委員会が置かれた。

研究会活動は以下の七つの地域区分をもとに行われる。(1) モスクワ近郊 (モスクワ県、中心地モスクワ)、(2) 中央 (トヴェリ、スモレンスク、カルガ、トゥラ、リャザニ、オリョル、タムボフ、ヴォロネジ、ペンザ、ヴラヂミル、ヤロスラヴリ、コストロマの諸県、中心地モスクワ)、(3) ヴォルガ沿岸 (ニジェゴロド、カザニ、シムビルスク、サマラ、サラトフの諸県、中心地カザニ)、(4) 北 (ペトログラド、ノヴゴロド、プスコフ、ヴォログダ、ヴァトカ、ペルミ、アルハンゲリスクの諸県、中心地ペテルブルグ)、(5) 南 (キエフ、ポルタヴァ、ハリコフ、エカテリノスラ

ヴ、ヘルソンの諸県，中心地キエフ)，(6) 西辺境（モギリョフ，ミンスク，ジトミル，カメネツ＝ポドリスクの諸県，中心地ミンスク)，(7) クリミヤ（クリミヤ半島）。むろん，中核的な拠点となるのは(1)と(2)だが，(4)に関しては，すでに研究蓄積のあるヴェイネル，(3)もΠ・M・ドゥリスキイとのコンタクトが必要とされているほか，県都に住む多くの個人との直接的な情報交換が重要とされている。特に，モスクワ県に現存するウサーヂバについては，そのフィールドワークの重要性が述べられ，作業がかなり進行しているクスコヴォ調査の現状について言及される。また，研究会が組織する公開レクチュアへの聴講が呼びかけられ，近い将来に予定されているモスクワ近郊へのエクスカーションには希望者は誰でも参加できるとされている。最後にズグラは，研究会の仕事と提案の多くは社会的な支持とサポートに負うところが大きいものであり，もしも，我々の研究会が今後も共感をもって迎えられるならば，すべての意匠の実現を保証する礎は，ロシア芸術史研究への関心がきわめて活発であるということにある，としてこのプログラムを締めくくっている。

研究会が研究のみを目指す集まりではなかったことは，上で紹介したプログラムで強調された公開レクチュアやエクスカーションへの自由参加に明らかであり，幅広く社会への教育・啓蒙活動を志向していた。研究会はそれに付属する形で17-19世紀ロシア芸術史のコースを準備し，1926年秋からは二年の課程を設けたが，それは授業・ゼミナール・エクスカーションの三者を組み合わせるシステムとなっていた。具体的には，講義のテーマとしては「18-19世紀ロシア建築史」（担当者ズグラ）「ロシア絵画史」（グレチ）「ロシア演劇史」（サフノフスキイ）「ロシア・インテリア史」（ノヴィツキイ）「ロシア装飾芸術」（ネクラソフ）「庭園・パーク芸術」（ズグラ），ズグラとサフノフスキイがそれぞれに対応するゼミナールを担当し，12月末にはズグラの指導によってロストフ・ヴェリーキイへのエクスカーションが行われた。さらには，調査報告・研究発表や講演を公開で行い，研究会活動の成果を幅広く社会へ還元していく試みに多くの労力が割かれた。その一例は「ウサーヂバ音楽の夕べ」の開催であろう。具体的には1923年6月8日にスタジオ「青い鳥」，同7月21日にはクスコヴォ宮殿において，18-19世紀前半の音楽作品のコンサートが披露され，大盛況だった（企画は音楽に造詣が深かったズグラによるものと考えられるが，彼の盟友だったグレチの文章「ロシア・ウサーヂバにおける音楽」（未刊）の存在を考えるならば，「ウサーヂバと音楽」の問題は研究会全体のテーマであったと言える）。

こうしたシステム運営に国家機関からの支援が一切なかったのには驚くほかない。しかも、研究会は他の研究機関との緊密な連携をきわめて重要視していた。具体的には、ミュージアムを管轄するロシア連邦共和国人民委員会のウサーチバ＝ミュージアムならびに修道院＝ミュージアム執行部の他、郷土学研究中央ビューロー（1921-1936年）、「古きペテルブルグ」協会（1920-1935、1925年から「古きペテルブルグ——新たなレニングラード」と改称）、「古きモスクワ」委員会（1909-1930年）、シベリア・ウラル・極東研究会（1924-

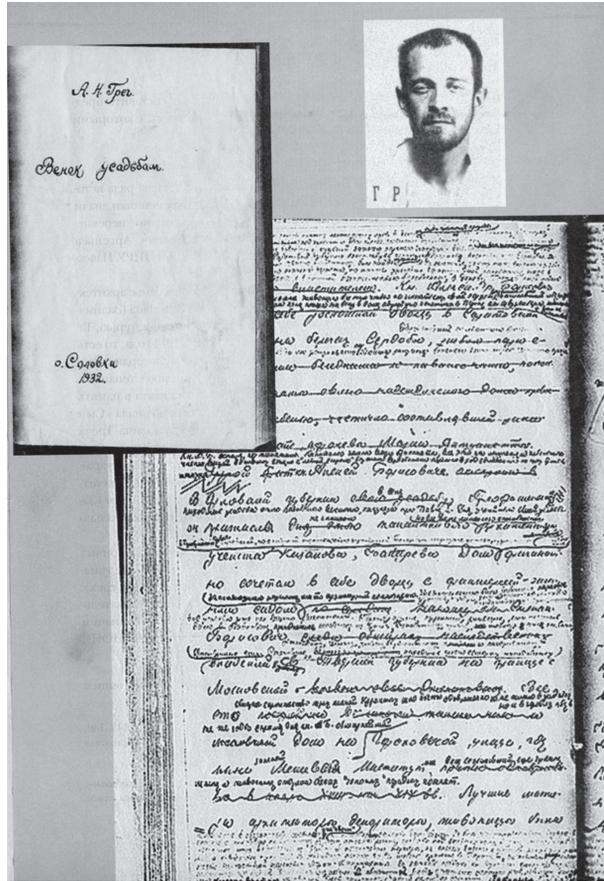


図2 А・И・グレチ（1930年8月） 同著「ウサーチバに捧げし花冠」原稿と表紙（下部に「ソロフキ 1932」とある）

博物館、演劇博物館、1840年代習俗博物館（1919-1929年）等との人的交流と情報交換が盛んに行われたが、それもズグラの構想力と行動力の賜物だった。ソビエト政権成立の直接的・間接的影響を受け、誕生ならびに消滅する文化、あるいはその両者が織りなす現実としての習俗 быт をいかに捉え、対象化するべきかの研究の場が、既成の枠組みを越えて「下から」生まれつつあった（後述する、1920年代半ばから後半にかけて盛んに議論された「郷土研究」もその例となる）。

ズグラの夭折は、研究会の退潮の直接原因ではなかったが、研究会の行く先を予言していたかのようである。ズグラに替わって、事実上は1927年秋から、正式には1928年春の選挙で代表となったのは会のナンバー2で、ズグラの片腕だったアレクセイ・ニコラエヴィチ・グレチ（本名はザリマン、ゾリマン、ザレマンとも）

である⁽²⁵⁾。しかし、会が活動を継続しようとしていた時期には「社会的・文化的組織の再編」が深く進行しつつあった。1930年6月にグレチは逮捕され、その直前の4月に、彼に替わって会代表になっていたのはA・B・グリゴリエフだが、その彼が会の最後を見届けることとなる⁽²⁶⁾。内務省教育人民委員会が、1930年8月20日付けで研究会の解散を宣告するのである。

研究会の実質的活動は1923年から1929年まで行われたと考えてよい。この期間に調査されたウサーヂバの数は数百を数え、この中で、モスクワ郡内に存在するウサーヂバの所在に関しては『ウサーヂバ芸術の記念碑 第1巻』が地図を付した形で出版された(1928年、106ページ)⁽²⁷⁾。これを含めて、活動した7年間で、研究会が刊行した出版物の点数は上で記した「計画書」を中心に24点(そこに掲載された仕事は130点を越えた)、ここには「論集」5巻(第1-8冊、1927年)プラス4巻(第2-8冊、1928-1929年)も含まれる。

ロシア革命と「国内戦」の「混乱」の中、貴族屋敷・ウサーヂバ文化はすでに文化的役割を終え、社会の流れからは無縁で遠いところに存在していたかに思えた。しかしこの歴史的・文化的遺産の価値を評価し、芸術学の中にも的確に位置づけようとした研究会の試みは「歴史のあだ花」などでもなければ、孤立した営みでは決してなかった。

4

ロシア革命という巨大な国家・社会・文化変動が社会各層とそれを構成する多数の人々の生活ならびに意識にどのような影響をもたらしたのか、そもそも革命前と比較して社会は変化したのか、変化しなかったのか、文化の「連続性」と「断絶」⁽²⁸⁾、「伝統」の有り様と意義に関していかなる視点を持つべきか——そのことをめぐる省察と議論ぬきに1920-1930年代の学問的営為は成立しえなかった。

そのことのほんの数例をあげる。「言語」に関して言えば、社会言語学分野においては、特に「都市俗語」をめぐるB・A・ラーリンの著作、農村の「方言」をめぐるH・M・カリンスキイ、奥バイカルに住む宗教異端派の言語記述ならびに『革命期の言語』(1928年)を著したA・M・セリシチェフ等々が想起される⁽²⁹⁾。また、1920-1930年代の農村社会研究については、きわめて多数の調査とその報告があることも周知のとおりである⁽³⁰⁾。民俗学に特化して見るならば、かつて19世紀後半に最初期の民俗学者たち(П・H・リュブニコフ、A・Φ・ギリフェルデン

グ)が豊富な口承文学を「発見」した北ロシア(セーヴェル)を再訪し、ソコロフ兄弟の指揮下に国立芸術科学アカデミーが行った調査⁽³¹⁾、また、同じく北ロシア(奥オネガ、ピネガ、メゼニ、ペチョラ)の口承文学のみならず農民芸術(建築、美術、民芸、演劇等)にまで注目したレニングラードの国立芸術史研究所の調査⁽³²⁾等々枚挙にいとまがないが、そのいずれもが貴重な報告と資料集を今に残している。しかも、そうした資料成果にとどまらず、調査時に残されたフィールド・ノートも⁽³³⁾、1920年代という大きな「転換期」にあって、伝統文化の「変容」と「不変」に直面した研究者の知的関心の有り様を知る上で貴重な資料となる。彼らのテキストに大きな学史的・文化史的意義があると考えられるからである。

こうした多分野からの盛んなフィールド調査と並行して、歴史学、言語学、民族学、民俗学、地理学、文学研究等々の分野で大きな論点となったのは「郷土学」(あるいは地域・地方研究、краеведение)をめぐる問題である。ロシア革命直後から、その研究の必要性が声高に唱えられ、それをいかに理解すべきかについて議論が生まれたことは、表層からのみ見れば、ごくささやかで、文字通りローカルな現象とされかねないが、ウサーチバ研究も含めた1920年代の人文科学研究全体の在り方を考える上できわめて重要である。その具体的な事実を見よう。

1921年12月に第一回全ソ連郷土学会議がモスクワで開催された。ここには、科学アカデミー会員С・Ф・オリデンブルグ、言語学者Н・Я・マール、歴史家М・М・ボゴスロフスキイ、地理学者Д・Н・アヌーチン、西欧中世史家И・М・グレヴス、文学研究者Н・К・ピクサーノフら多くの分野の専門家が参加し、12月10-20日の長期間にわたり、民族学者В・В・ボグダノフの基調報告「郷土学の課題ならびにロシアにおけるその歴史」を始めとする192の報告がなされた。全体として、人文研究相互の関連性と統合に関する議論、そして全ソ連レベルでの郷土学の重要性の確認が行われ、郷土学中央ビューローの設立が決定された⁽³⁴⁾。このコンフェレンスは1924年に第二回、1927年12月には第三回が開催され、1923年からは先のオリデンブルグとマールを編集長として機関紙「郷土学」(全6巻、全体で3253ページ)も刊行された。その意味で、郷土学は1920年代に文字通り言説化していったと言える。それは、インターナショナリズムを標榜する中央と、もっとも具体的でミクロな各地方との「相克」と「調整」の動きを象徴していた。「上からの」地域研究の促進と奨励に呼応する形で、各地に多くの郷土学の拠点たる諸機関が新たに誕生したのであり、1925年1月1日付けの登録数は1301、1927年には1763機関を数えた⁽³⁵⁾。

歴史学者のC・O・シュミットは1917-1927年の10年間は郷土研究の「黄金期」であったというが、そのことは同時に、1920年代末に郷土研究の方向性が一つの「結着」を迎えたことを意味する。1929-1930年に中央黒土地帯で起こった一連の「郷土学者事件」がそれを象徴していたのであり、1920年代半ばの郷土学への執着の動きは遮断されることになる⁽³⁶⁾。

ロシア・ウサーヂバ研究会の活動はこの郷土学・地域研究の在り方と深く関わっていた。活動の時期ならびに研究対象・内容が重なるだけでなく、その成果の社会的「還元」、さらには研究会の組織化という点でも通底していたことは重要であり、その意味から、まさしく同時代性というコンテキストで理解できるはずである。Д・С・リハチョフは「研究かつ活動としての郷土学」と題する論考で、郷土学が「教育的役割」ならびに「道徳的使命」を備えるべきことを強調している。ウサーヂバ研究会が、自らの研究成果をアカデミズムに向けて閉じるのではなく、公開のレクチュアや報告会を開催し、調査への自由参加者を広く求めたこと、ミュージアム案内を充実させ、文化財の意義と保全を訴えたことはまさにそのことを意味する。ガイドブック刊行とガイド養成は、それがいずれ「ソビエト化」するとしても、社会的教育と啓蒙として大きな意義を与えられたことは間違いない。さらにリハチョフが郷土学について「研究の対象ならびに結論にたいして愛情を込めた態度 *неравнодушное отношение* を要求する」⁽³⁷⁾と書くのを読むとき、ウサーヂバという最重要文化財の壊滅に無関心でいられたはずがなかった研究会メンバーのメンタリティは、郷土学に邁進していた多くの人々のそれと共通していた。この意味で、ウサーヂバ研究会の活動は孤立無援の例外的な運動ではなかった。

若きインテリゲンツィヤの多くは、20世紀初頭に開始されたアヴァンギャルド運動をはじめとする知的・文化的な地殻変動に熱狂し、その大きな渦の中で翻弄されていた。歴史的役割を終えたかつての貴族屋敷とその文化は、時に、アヴァンギャルド運動とは逆の方向を定位するかに見えた。それは、20世紀初頭まで存続したロシアの「中世的後進性」（大貴族地主による土地・農奴支配に代表される）と「貴族趣味」の象徴として捉えられ、時に、それに関心を示すことは「後ろ向き」とされることがあった。

しかし、こうした見方がきわめて図式的で単純素朴な印象でしかないことは、上で紹介したロシアの多様なフィールドを対象として行われた多くの調査ならびに研究会をはじめとした関心の動きから明らかである。大きな社会・文化変動が起きる中で、社会表層から容易には見えない、見えなくなる、あるいは消滅していく/さ

せられていく部分（それを伝統文化、民衆文化・ナロード文化、あるいはウサーヂバ文化と呼ぶとすれば）にこそ、危機意識と記述・観察衝動に充ちたまなざしは向けられるべきだった。こうしたまなざしを通してすくい上げられたものが民族・民俗文化とその文化資源・文化財であったのだから。

5

このように考えたとき、1920年代のズグラならびに彼が組織した研究会の活動が1980-1990年代に大きな意味を付与されて「復権」したことは⁽³⁸⁾、十分理解できる。その動きは1980年代半ばのペレストロイカ期に現れるが、特にその中心的役割を担うのはソ連邦科学アカデミー付属歴史学研究所の上級研究員だったII・B・イヴァノヴァである。彼女は、ズグラの研究者としてのずば抜けた才能と組織力に注目し、それまでまったく歴史の舞台から抹殺されていた彼とウサーヂバ研究会に関する調査を開始する。彼女は、研究会に関していくつもの論文を発表すると同時に、会の再興を願って社会各層へ働きかけを行う。1990-1991年段階で、リハチョフが会長をつとめていた「ロシア国際文化ファンド」（当時の名称）に支持を求めた。ファンド附属「ロシア・ウサーヂバ研究会再興」プログラムによる研究・社会委員会をファンド附属の形で創設することが決定されたのは、1991年12月29日である⁽³⁹⁾。それは、ソ連崩壊がまさに進行中の時期であった。

翌1992年4月20-22日にモスクワで開催された「17-20世紀初頭ロシア・ウサーヂバ——研究と復興の諸問題」と題される学術=実務会議は、70年以前にズグラが夢見た本格的なウサーヂバ研究への道を文字通り解禁するものだった。参加者は歴史家、芸術学者、修復家、建築家、ミュージアム・アーカイブ・図書館勤務者、その他の社会的活動の代表者等々、社会各層から、専門も実に多岐にわたる人々であり、300名を数えた。会議では、1920年代に存在したロシア・ウサーヂバ研究会の再建が不可避であること、名前は継承することが満場一致で認められ、会規約の承認、執行部選出、芸術学博士B・II・ヴィゴロフの初代会長就任、1920年代に出版された論集「ロシア・ウサーヂバ」の継続刊行（その連続性を伝えるため、通巻の番号を併記）、そして会のエンブレム（A・II・クラフチェンコとII・Hパヴロフの作）を元通り使用することなども承認された。

再興された研究会は、20年を経た現在、モスクワ市内コスモナフト通りにあるリハチョフ記念文化・自然遺産研究所の中に置かれている。会は17名の執行部メ

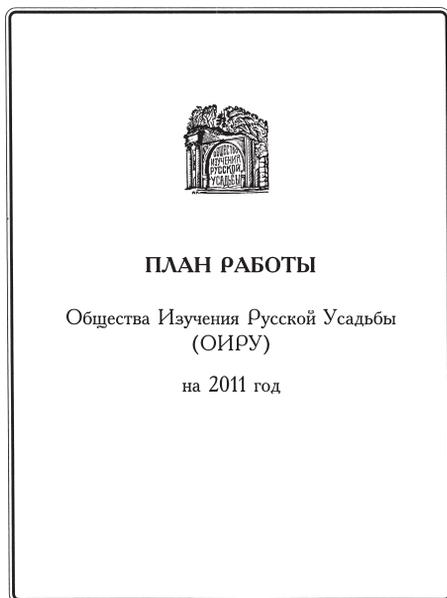


図3 再興された「ロシア・ウサーヂバ研究会」が作成した「2011年度活動プラン」(上部にあるのは1920年代に研究会が使用した会のエンブレム)

ンバーによって運営され、1994年に通巻17号として再刊された「論集」は第32号を数え(2012年7月時点)、エクスカージョンの計画ならびに調査旅行、報告会・学会・情報交換会等々の精力的な活動を継続している⁽⁴⁰⁾。会員数は200名を越える。さらに、コンフェレンスのテーマもさまざま、年次テーマのいくつかをあげると——「ウサーヂバと現代」(1993年)「ロシア・ウサーヂバの文化」(1995年)「モスクワ近郊ウサーヂバの歴史と文化、ロシア・ウサーヂバ史ミュージアム設立の諸問題」(1995年)「モスクワ市内のウサーヂバ」(1996年)「ロシアにおける貴族と商人のウサーヂバ」(1997年)「首都とウサーヂバ」(1998年)「プーシキンとウサーヂバ」(1999年)

「未知のウサーヂバ」(2000年)「ロシア・ウサーヂバの庭園＝パーク文化」(2001年)「遺産対象としてのウサーヂバのランドシャフト」(2003年)「ロシア・ウサーヂバ。21世紀」(2007年)等。

研究会の長は(二代目会長のイヴァノヴァ(1995-1999年)を継ぐ)、文化遺産研究所長のЮ・А・ヴェデーニンである(2000年以降)。彼が旧ソ連邦科学アカデミー附属地理学研究所の出身であることから、彼の研究所には地理学・環境学・文化遺産保護研究等のセクションがあり、ウサーヂバ研究会もそれらの研究者・活動家と多くのコンタクトを取っている。特に現時点で、研究所全体が「環境・自然、人間・習俗の一体化」といったストラテジーを持ち、「文化的ランドシャフト」をキーワードとして活動していることは、今後のウサーヂバ研究会にも影響を与えると考えられる⁽⁴¹⁾。

現代における「ウサーヂバ研究会」再興の意味は何か。そして、1920年代のズグラと研究会の活動の現代的意義は何か。それはたんに、ロシア革命とソ連崩壊という、状況的に言えば一つの大きなパラダイムの崩壊あるいは転換の前後という図式的アナロジーによっては十分説明できないだろう。むしろ、1920年代にすでに

顕著だった人文科学研究全体の「脱ジャンル化」「学際化」、さらに「グローバル化」の有り様を考えること——そのことに、現代への示唆はないだろうか。現代のウサーヂバ研究が1920年代のそれと比べて、現代のより複雑で困難な文化状況下、はるかに多数の情報と多角的アプローチが要求されることは間違いない。未だ1920年代には、ウサーヂバの記憶が生き生きと残っていたとすれば（例えば、V・ナボコフやII・A・ブーニンの作品の中に）、現代はすでに「残像」ですら存在しえないのかもしれない。そうした中で、現代のウサーヂバ研究は建築学・美術（史）学・文学のみならず、地理学、歴史学、社会学、民族学、民俗学といった関連分野に広く「開かれて」いくだろうか。しかもアカデミズムを「越える」啓蒙性と教育性をはたして獲得できるだろうか。

注

1. 彼の生涯に関しては、Злочевский (2002a) がきわめて周到な調査にもとづいており、詳しい。論文の末尾に、ズグラに関する文献目録（刊行された著作54点、書評7点、編集した仕事8点、未公開21点、彼の生涯と仕事に関する文献30点）があり、役立つ。1980年代までほとんど知られていなかったズグラの存在を知らしめたのはКончин (1989) であり、1988、1989年段階になって、ズグラならびに「ロシア・ウサーヂバ研究会」の存在について書くことができるようになったとする歴史学者Л・В・イヴァノヴァが「復権させた」。Иванова, Л. В. (1991, 1996) を参照。
2. Иванова, Л. В. (1991: 167) の註).
3. ズグラの仕事の中には、グラズノフの音楽によるバレエのリブレット（未刊）、舞踏の振付家・理論家И・С・チェルネツカヤに関する論文（1925年）等がある他、音楽家になる希望も持っていた。
4. ズグラとチャヤーノフの交流についてはКабанов (1997: 300)。チャヤーノフは、プーシキンの時代に強い関心を持ち、特に当時の絵画収集に関する「百年以前のモスクワ絵画収集」（1917年）「古きモスクワの収集」（1922年）と題する論考を残した他、モスクワの郷土史論文「ミウス広場の歴史」（1918年）、ロマン小説「ある床屋の人形、あるいはモスクワ建築家Mの最後の恋」（1919年）をはじめとした多くの著作がある（В. Н. Балязин, Профессор Александр Чаянов. Стр. 129-136. М., 1990.）。その中で、1920年に発表された小説『わが兄弟アレクセイの農民ユートピア国への旅』は邦訳されている（『農民ユートピア国旅行記』和田春樹・和田あき子訳、1984年、晶文社）。ここにはモスクワのトポスに関する著者の豊富な知識を基礎とする無数のコノテーションが散りばめられていて、考察に値する。邦訳の巻末には訳者によるすぐれた人物紹介があり、参考になるが、モスクワ学者としての側面については言及がない。モスクワ研究者としてのチャヤーノフに関しては、上にあげたКабанов (1997: 298-314) が詳しい。ちなみに、チャヤーノフの名誉回復は1987年。
5. Злочевский (2002a: 559).

6. 後の著名な建築史家で芸術学博士 Н・И・ブルノフの回想による。(Злочевский, 2002a : 558-559).
7. Злочевский (2002a : 561).
8. これは、傑出した芸術史家である П・П・ムラトフが編集し、企画では全 50 冊からなるシリーズ「芸術」の一冊として刊行された。このシリーズでズグラは「ロシアにおける外国人建築家」「現代ロシア建築」の二冊を執筆する予定だった。
9. Злочевский (2002a : 583-587).
10. バロックならびにアンピールといった西欧起源の美術様式が、芸術史研究の基本的概念として（西欧起源ならびにその普遍性を含めて）本格的に論じられるようになったのは、ソビエト期に入ってからであり、かろうじて 1920 年代は「自由な」議論と研究の素地があった。1926 年に刊行された論文集『ロシア・バロック』、先駆的研究者としてのヴィペルによるバロック論（彼の主著『ロシア・バロック建築』（1978 年）は 2008 年に再刊。ここには、17 世紀以降のロシア建築史におけるバロックをめぐる基本的な問題設定がなされている他、「バルト海沿岸地域におけるラストレルリ」等の注目すべき仕事収録されている（Б. Р. Вишпер, Архитектура русского барокко. М., 2008.）, ならびにズグラ（先の論文集に収録された「ロシアにおけるバロック発生の問題」）やグレチ（同論文集に、博士候補論文の一章である「18 世紀ロシア絵画におけるバロック」を発表）の関心や関連する仕事を参照。
11. Злочевский (2002a : 565).
12. 『全モスクワ』は長らくの「沈黙」の後、1990/91 年版が 1989 年に出版された。その序文には『全モスクワ』の出版史が簡単に述べられているが、それによれば、こうした試みは 1894 年の А・С・スヴォーリンによって開始され、ソ連時代には 1922 年に再開され、1936 年まで継続したこと、中でも 1925 年版が「もっとも完全」と記されている。
13. 研究会の活動成果を数多く掲載した雑誌「コレクターの中で」（1921-1924 年）の刊行で知られる。
14. Злочевский (2002a : 570). ズグラはクスコヴォをポドモスコヴィエでもっとも注目すべきウサーヂバの一つと考えていた。
15. 1885 年に生まれ、『ロシア民族芸術』（1924 年）Русское народное искусство. М., 1924. 『ロシア・アンピール』（1935 年）Русский амбир. М., 1935. 等の著作がある彼は「ウサーヂバ研究会」の活動メンバーであった。流刑され、1950 年に死去。1920-1930 年代における彼の仕事の概略は、Ю. Р. Савельев, А. И. Некрасов и его труды по истории зодчества. //Петербургские чтения 96. СПб., 1996.
16. バージェノフ研究史におけるズグラの位置づけに関しては、Ю. Я. Герчук, Историография В. И. Баженова. //В. И. Баженов и М. Ф. Казаков. Проблемы творческого наследия. Сборник научных трудов. Вып. 5. Стр. 12. М., 1997.
17. ズグラの死後、彼の遺体は 9 月 24 日にモスクワへ運ばれ、セミョノフ墓地に埋葬された後、プレオブラジェンスキイ墓地へ移された。墓には石柱記念碑があったとの証言があるが、現在はその記念碑はないという。Злочевский (2002a : 578, 583). 彼を追悼する集まりは 1927 年 12 月 3 日に国立芸術アカデミーが主催、彼が残した草稿をはじめ多数の資料は友人たちが保管して守った。その一人で、研究会メンバーの И・М・カルタフツォ

フが1959年に中央国立文学・芸術文書館に持ち込むまでその所在は不明だった。

18. Иванова, Л. В. (1991 : 168).
19. この集まりに具体的に何名が集まったのかは不明だが、ズロチェフスキイのアーカイブ調査によれば、「会の設立者」は以下の9名——Ю・П・アニシモフ（国立トレチャコフ・ギャラリー管理官, 1886年生まれ, 以下同じ）、Ю・А・パフルーシン（国立ポリシヨイ劇場助手, 1898年）、Б・Р・ヴィペル（モスクワ第一大学教授, 芸術学, 1888年）、А・Н・グレチとズグラ（考古学・芸術学研究所大学院生, 1899年ならびに1903年）、Б・П・デニケ（モスクワ第一大学教授, 東洋学, 1885年）、И・В・エヴドキモフ（国立出版局編集者, 1887年）、В・Г・サフノフスキイ（コトバ研究所教授, 「コメディ」劇場演出家, 1886年）、С・А・トロポフ（モスクワ諸研究所教授, 建築家, 1882年）——である。Злочевский (2011 : 88-89).
20. 送られたアンケートの質問項目は、全項目記入が必須として、1. 名前, 2. 場所, 3. 最終所有者, 4. 主要な建築的特徴, 5. 現在の保存状態, 6. 歴史的データ, 7. 建築（建物リストと簡単な記述）, 8. 庭園建築とパーク, 9. ウサーヂバ邸の室内調度, 10. コレクション, 11. 書庫, 12. アーカイブ, 13. 劇場ならびに演劇用建物, 14. 書誌ならびにアーカイブ典拠, 15. 建築資料（設計図, 図面等）, 16. イコノグラフィ（図, 版画, 絵, その他, 建物の描写）, 17. その他の註, からなる。「1924年夏のエクスカーシオン計画書」より。
21. Иванова, Л. В. (1998 : 7).
22. Русская усадьба. Вып. 4 (20), стр. 24-28. М., 1998. さらにこのリストによれば、生年世代別メンバー数は1850年代生まれ1名, 1860年代が4名, 1870年代14名, 1880年代が22名, 1890年代22名, 1900年以降の生まれが12名, 生年不詳17名。この中で、6名が銃殺され, 13名がラーゲリに送られた。
23. 初出は雑誌「建築」(1923年, 3-5号)だが, 上記註22にあげた「ロシア・ウサーヂバ」第4(20)号(1998年)で読める。Згура (1923 : 17-22).
24. 20世紀初頭まで、厳密に言えば、ロシア革命前におけるウサーヂバ研究の「萌芽」直前までの研究史は、ウサーヂバ研究の問題点ならびに現代的意義も含めて、坂内(2004)で素描されている。ただし、ウサーヂバに関する現代の優れた書誌学者ガロリド・ダヴィドヴィチ・ズロチェフスキイによってなされた完璧かつ秀逸な仕事を前にして、あるいはそれ抜きに研究史は書かれ得ない。これまで彼によって編纂・刊行された書誌は『ロシア・ウサーヂバ 文献書誌史概観』(2003年), 『銀の時代の遺産 Н・В・ソロヴィヨフ, П・П・ヴェイネル, Н・Н・ヴランゲリ』(2006年), 『ポドモスコフヴェの古きウサーヂバとダーチャ (1992-2006)』(2008年)の三点である。Злочевский (2003 ; 2006 ; 2008). 例えば、ヴランゲリの記念碑的論考である「地主のロシア」は、「昔の日々」誌(1910年, 7-10月号)に初めて掲載された。ちなみに、この号はウサーヂバに関する論考6本と、研究史上で最初の書誌を掲載している。
25. グレチは、1930年6月、妻とともにヴィザなしでラトヴィアへ入ったことを理由に逮捕され、10年刑でソロフキへ送られた(1928年11月から1931年11月までソロフキにいたД・С・リハチョフはグレチを「図書室で司書として働く」郷土学研究会「昔のウサーヂバ」«Старая усадьба»の会員」と回想している(Лихачев, 1991 : 119. ただし、「プーシキン時代の有名なグレチの子孫」と書いているのは、有名なこの批評家を尊敬し

- ていたことから使用されたペンネームであることから、誤り))。グレチは1935年に釈放されてからはトゥラに住んだが、1937年11月に再逮捕、無実を訴えるが、後に罪を認めて1938年4月に銃殺刑となる。彼は1932年に、研究会におけるウサーヂバ研究ならびに自らの芸術史研究の総括をすべく、モスクワ近郊を中心とするウサーヂバ47を選んで叙述した。当時、ラーゲリに収監されていたことから、手元には大した資料がなかったのは当然であり、参考文献や註がなく、通常の学術論文とはまったく正反対の「案内書」である。しかもきわめて「文学性の高く」凝縮された高質の文体で書かれている点で特異なこの書は『ウサーヂバに捧げし花冠』と題された原稿のままに残された。1990年代になってようやく、歴史博物館に保管されてあるのが発見され(図2)、1995年に「祖国の記念碑」誌に発表された。グレチ、彼の仕事ならびに『花冠』に関しては、Злочевский (2001)、Писарькова и Горячева (2006)。
26. 彼も、1934年頃にラーゲリで亡くなったとされている。Кызласова (1998); Злочевский (2001)。ただし、研究会が解散したからという理由で、ズグラと会メンバーによって共有されたモノが失われたとするのは、あまりにも単純な見方である。1980年代末以降の研究会「再生」を準備し、そのための資料と「記憶」を保持し続けた多数の人々とその「力」を忘れてはならない。例えば、研究会メンバーの一人だったМ・И・イリイン(1903-1981)の著書『ポドモスコヴィエ』(1966) М. А. Ильин, Подмосковье. М., 1966. を読むとき、その平明かつ正確な学術的文章の背後にあるのは、明らかに、1920年代のロシア・ウサーヂバ研究会が蓄積していったもっとも具体的な土地の文化と歴史への周到な観察・アプローチと洞察であり、それを啓蒙的に記述していく方法の模索である。
27. 研究の最初期段階に必要なウサーヂバの所在確認は、今なお継続して精力的に行われている。モスクワ(ポドモスコヴィエ)に関しては、А. Б. Чижков, Подмосковные усадьбы сегодня. Путеводитель с картой-схемой. М., 2000; Его же, Подмосковные усадьбы. Аннотированный каталог с картой расположения усадеб. 3-е издание, переработанное и дополненное. М., 2006. 前者には582、後者では690のウサーヂバの基本データが地区別に記され、詳細な地図が添えられている。同じくポドモスコヴィエについては、А. И. Фролов, У Подмосковья. М., 2003. があり、きわめて詳細な参考書である。ここには約3500のウサーヂバが名前のアルファベット順に立項され、簡潔に記述されている。この二つのモスクワ近郊ウサーヂバ案内の編者はともに現ウサーヂバ研究会のメンバーであり、双方の仕事の間に矛盾はない。むしろ、ズグラのプログラムに記されたとおり、各ウサーヂバのデータ化(カード化の際のアルファベット順とトポグラフィ別)が相互補完的に行われていると考えられる。
28. ユーリイ・ロトマンの「最後の」著作『文化と爆発』(1992年) Ю. М. Лотман, Культура и взрыв. М., 1992. もロシア史における「断絶と連続」に関する問題設定と議論というコンテキストの下で読むことが可能である。
29. Б. А. Ларин, К лингвистической характеристике города (1928); Его же, О лингвистическом изучении города (1928). ちなみに、彼の全著作と業績リスト、さらに彼の仕事に関する論考と回想は Филологическое наследие. (СПб., 2003). に集大成されている。Н. М. Каринский, Очерки языка русских крестьян. М., 1936; А. М. Селищев, Забайкальские старообрядцы. Семейские. Иркутск, 1920; Его же, Язык революционной эпохи. М., 1928.

30. 奥田央「集団化過程の農民——民俗学者の調査資料にみる——」和田春樹編『ロシア史の新しい世界』（1986、山川出版社）。民俗学者ボゴラス＝タン指導による革命後の農村における文化的・社会的変容の調査とその評価については、坂内（1981：590）。
31. Ю・ソコロフ「リュブニコフとギリフェルデングの後を追って」『芸術フォークロア』Ⅱ-Ⅲ（モスクワ、1927）。Ю. Соколов, По следам Рыбникова и Гильфердинга. Художественный фольклор. 2-3. Стр. 3-33. М., 1927. 近年、1926-1928年にソコロフ兄弟が「リュブニコフとギリフェルデングの後を追って」というスローガンの下で行った民俗学調査の成果がロシア科学アカデミー・世界文学研究所によって刊行されている（全2巻の予定、第1巻「叙事詩」は2007年刊行）。Неизданные материалы экспедиции Б. М. и Ю. М. Соколовых. 1926-1928. По следам Рыбникова и Гильфердинга. В двух томах. Т. 1. М., 2007. 1920年代における民俗学・フォークロア研究をめぐる基本的問題点は、坂内（1981）において概観されている。
32. この北ロシア調査は、国立芸術史研究所（1912年に創立、演劇・音楽・映画芸術研究所として現在に至る）社会学委員会農民芸術部門が企画し、1926年から1929年にかけて行った。参加者は民家研究のК・К・ロマノフを先頭に、民謡学者Е・В・ギッピウス、演劇史研究のВ・Н・フセヴォロツキイ＝ゲルングロス、ブリリーナ研究者として知られるА・М・アスタホヴァの他、А・И・ニキフォロフやИ・В・カルナウホヴァ、Н・П・コルパコヴァら、当時はまだ「駆け出しの」フォークロア研究者がいた。その公刊された成果は『セーヴェルの芸術』（全2巻、1927-1928年、「ソ連の農民芸術」シリーズ）Искусство Севера. 1-2. Л., 1927-1928. の他、最近になって、М・Н・ヴラソヴァ編『1926-1928年のロシア・セーゼル調査の未刊資料』（2011年）が「プーシキン館」より刊行されている。Неизданные материалы экспедиции на Русский Север 1926-1928 гг. Сказки. Легенды. Былички. Детский фольклор. СПб., 2011. また、この研究所の北ロシア調査によって撮影された貴重な写真は、М・И・ミリチク『古い写真に見る奥オネガ』（2001）『奥オネガ。歴史と文化』（2007）М. И. Мильчик, Заонежье на старых фотографиях. СПб., 2001; Его же, Заонежье. История и культура. СПб., 2007. で多くを見ることが出来る。
33. 当時、研究所の院生だったコルパコヴァがこの時の調査時に書き残したフィールド・ノートは1975年に「ナウカ」出版社から、さらに、著者の死後、1950年代のノートも加えられて2002年には著者の生誕百年記念として、いずれも『黄金の泉のほとりにて』のタイトルで公刊されている。Н. П. Колпакова, У золотых родников. (Записки фольклориста). СПб., 2002.
34. Иванова, Т. Г. (2009 : 324-328). 1921年12月に行われた全ロシア地域研究会議については、土肥（2010 : 263, 283-284）を参照。ここでは、この会議でМ・М・ボゴスロフスキイが行った報告の内容が紹介され、彼の仕事の全容とロシア革命期における地方史研究の諸問題について論じられている。また、同じ会議で民俗学者Ю・М・ソコロフが行った報告については、坂内（1981 : 585-593）を参照。
35. 郷土研究の機関（中身については問わない）の創設数は、1918年に87、1919年86をはじめとして1920年—124、1921年—80、1922年—73、1923年—113、1924年—244、1925年—281、1926年—247、1927年—166である。Иванова, Т. Г. (2009 : 324).
36. Писарькова и Горячева (2006 : 15-16). 土肥（2010 : 284-285）。

37. Лихачев, 2006 : 328. これに関連して思い出される人物は、1920年代にレニングラード・エクスカーション大学で人文部門主任として、また、「郷土学中央ビューロー」で働いていたИ・М・グレヴス(1860-1941年)である。ロシアのビザンツ研究の祖であるВ・Г・ヴァシリエフスキイの弟子である彼は、ロシア革命期まで、イタリアを中心とする西欧中世都市研究の一大専門家としてペテルブルグ大学教授のポストにあった(その多くの弟子の中には、「ドストエフスキイとペテルブルグ」をテーマとする有名な三部作の著者であるН・П・アンツィフェロフもいた)。彼は1920年代に、郷土的・教育的な多くの論文を発表し、特にレニングラードの郷土研究と、その成果を社会的に利用する「町案内」の充実に大きく貢献した。都市文化の研究者である彼の関心とウサーヂバ研究には、いくらか「距離」があるとはいえ、通底する部分は大きい。これについては、グレヴスがロシア・ウサーヂバ研究会の活動に注目していたことを参照のこと。ズグラと研究会活動に関する彼の複数の論評が「郷土学」誌に掲載されている。Краеведение, 1927, 4, стр. 550-551; 1929, 3, стр. 186-191. この時期の彼の文化論の基本は、同じ「郷土学」誌(1929年, 6号)に掲載された論考Памятники культуры и современность. に詳しいが、ここにもウサーヂバの文化史的意義についての言及がある。グレヴスに関しては、В. С. Каганович, И. М. Гревс — историк средневековой городской культуры. //Городская культура. Средневековье и начало нового времени. Л., 1986. が参考になる。彼の指摘によれば、この時期のグレヴスの仕事として「歴史・教育エチュード」(1924年)「都市とその生。文化史から見た郷土学概論」(当初の表題は「歴史と都市の生。文化的郷土学に関するエチュード」, 1927年)があるが、共に未刊という。
38. 現代におけるウサーヂバ(貴族の館)研究, ならびにロシア・ウサーヂバ研究会の「再建」については、土肥(2010:295-299). ここでは、Ю・А・チーホノフの社会経済史的視点からのウサーヂバ研究が紹介されている。
39. これに先行する同年4月の時点で、「ロシア地方文化の諸問題」をテーマとするコンフェレンスが開催され、ここですでに研究会の創設が提起されていた。また、1991年10月10日に各研究機関から35名の人々がモスクワ市内の文化学研究所の会議室に集まり、会再興を決めた。1990年以降の研究会再興の動きについては、Иванова, Л. В. (1998).
40. 本稿著者は、2011年2月24日にこの研究会を訪問し、会長のヴェデーニン氏をはじめ多くの会員に面会することができた。現在の活動の概略は、会のホームページ、「論集」に毎号掲載される「クロニクル」等を通して知ることができるとはいえ、実際の会員とコンタクトを取ることによって貴重な情報ならびに会の「雰囲気」を知り得た。同日、研究所1階の展示室(会議室)で行われた歓談の場に参加したメンバーは、Ю. А. Веденин, Л. А. Перфильева, Г. Д. Злочевский, И. Н. Слюнькова, А. В. Чекмарев, Л. Б. Сомова, Н. В. Ром, Н. А. Филипова, Н. И. Завьяноваである。
41. 研究所全体の方向性と関心は、論文集 Культурный ландшафт как объект наследия. М.-СПб. 2004. によって知ることができる。ここに収録されたヴェデーニンによる綱領的ウサーヂバ論「文化遺産としてのウサーヂバ・ランドシャフト」を参照のこと。Веденин(2004).

参考文献

- Веденин, Ю. А. (2004) Усадебный ландшафт как тип культурного наследия. //Культурный ландшафт как объект наследия. М.-СПб.
- Згура, В. В. (1923) Общество изучения русской усадьбы. //Русская усадьба. Вып. 4 (20). М.
- Злочевский, Г. Д. (2001) Алексей Греч. Расстелянный талант. //Русская усадьба. Вып. 7 (23). М.
- Злочевский, Г. Д. (2002а) Владимир Згура («...дал бы еще исключительно много для истории русской архитектуры»). //Русская усадьба. Вып. 8 (24). М.
- Злочевский, Г. Д. (2002б) Общество изучения русской усадьбы (1922-1930). М.
- Злочевский, Г. Д. (2003) Русская усадьба. Историко-библиографический обзор литературы (1787-1992). М.
- Злочевский, Г. Д. (2006) Наследие Серебряного века. Избранные страницы. М.
- Злочевский, Г. Д. (2007) Библиографический указатель. М.
- Злочевский, Г. Д. (2008) Старинные усадьбы и дачи Подмосковья. Библиографический указатель. М.
- Злочевский, Г. Д. (2009) Общество изучения русской усадьбы в прошлом и настоящем. // Подмосковский летописец, 2009, No. 3.
- Иванова, Л. В. (1980) Формирование советской научной интеллигенции. М.
- Иванова, Л. В. (1989) Общество изучения русской усадьбы. //Памятники Отечества. 1 (19). М.
- Иванова, Л. В. (1990) Общество изучения русской усадьбы. //Отечество. Вып. 1. М.
- Иванова, Л. В. (1991) «Такой талантливый и так много обещавший человек...» // Краеведы Москвы. Вып. 1.
- Иванова, Л. В. (1996) ЗГУРА Владимир Васильевич. // Историки и краеведы Москвы. Некрополь. М.
- Иванова, Л. В. (1998) Два юбилея. // Русская усадьба. Вып. 4 (20), М.
- Иванова, Т. Г. (2009) История русской фольклористики XXвека. 1900-первая половина 1941 г. СПб.
- Кабанов, В. В. (1997) Москва Чайановская. Александр Васильевич Чайанов. 1888-1937. //Краеведы Москвы. Вып. 3. М.
- Кызласова, И. Л. (1998) Новое о судьбе А. Н. Греча и Г. В. Жидкова. //Русская усадьба. Вып. 4 (20). М.
- Кончин, Е. (1989) «Сим удостоверяется...» //Куранты. Историко-краеведческий альманах. Вып. 3. М.
- Лихачев, Д. С. (1991) Книга беспокойств: Воспоминания, статьи, беседы. М.
- Лихачев, Д. С. (2006) Воспоминания. Раздумья. Работы разных лет. СПб., 2006. Т. 2.

Общество изучения русской усадьбы. 1992-2007. (Буклет) Б. г. М.

Писарькова, Л. Ф. и Горячева, М. А. (2006) Книга «Венок усадьбам» и ее автор А. Н. Греч. // А. Н. Греч, Венок усадьбам. М., 2006.

Русская усадьба. Сборник Общества изучения русской усадьбы. Вып. 1 (17)-16 (32). 1994-2011.

土肥恒之 (2010) 『ロシア社会史の世界』日本エディタースクール出版部.

坂内徳明 (1981) 「ソ連民俗学の形成——1920年代前半のユーレイ・ソコロフを中心として」 「一橋論叢」85-4.

坂内徳明 (2004) 「ロシアのウサーヂバ (貴族屋敷) 文化研究序説 (1)」 「一橋大学研究年報 人文科学研究」41.